

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年4月19日（水）
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長 他

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めたいと思います。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。アベさん。

○記者 日経新聞のアベです。よろしくお願いします。

委員長の人事についてお伺いさせてください。昨日、国会同意人事が衆参両院に提示されて、委員長の後任に更田さんになるという案が出されました。案が同意されれば、委員長は9月18日で退任になるかと思います。今の率直な感想とか、受けとめ、そういったものをまずお願いいたします。

○田中委員長 非常に率直に言うと、ほっとしたし、安心したということですね。ただ、それだけではちょっと、多分、もう少し聞きたいのしょうけれども、よく言いますように、私は今、もう72歳なのです。規制委員長というのは、一般的なマネジメントも、全体もありますけれども、やはり原子力のいろいろな危機管理ということもあって、今もずっと危機管理宿舎にいるし、今度の連休もずっと危機管理宿舎に足どめという状況なのです。もう4年半やってきましたからね。それに、年相応にあちこちトラブルもありますので、いいときかなと思って、ほっとしています。

○記者 わかりました。どうやら政府は田中委員長が続投するというのも模索していたということも聞いています。2期目を引き受けなかった一番の理由はどこになるのでしょうか。

○田中委員長 引き受けなかったというのは正しくなくて、引き受けられないなという感じですね。もうそろそろね。今、申し上げたように、逆に迷惑をかける可能性もありますので、そういうことを考えると、そう軽々にはということです。ただ、残り、あと5カ月ありますから、その間はしっかりやります。

○記者 わかりました。最後なのですけれども、委員長は就任するときに、決意として、1F事故を踏まえて、日本のために身を投げ出すべきと考えたというお話もあったかと思えます。就任してから、一番の規制委員会の課題は、原子力規制の信頼回復だったかと思えます。退任される理由は、当初の目的をある程度なし遂げられたということもあるのでしょうか。

○田中委員長 信頼回復という目的はそう一朝一夕にできることではないということは再三にわたって申し上げてきました。ただ、福島のような事故は二度と起こさないという規制はしますと。そういう取組をするということでは、一定程度やってきているという自負はあります。ただ、実際の信頼は、原子力発電所なら発電所がきちっと長いこと安全に動いていく中でしか得られないだろうということは、この前も国会で申し上げました。口で幾ら言ったって誰も信用しませんから。そういう意味では、規制庁、規制委員会の永遠の努力目標だと、私はそう思っていますし、次期委員長もそういう思いは多分、共有していただけるのだらうと思っています。

○記者 わかりました。ありがとうございました。

○司会 ほかにございますでしょうか。シゲタさん。

○記者 NHKのシゲタです。

関連してお伺いしたいのですが、先ほど、次期委員長もそのような思いを持っていると思うという話もありましたが、まず、更田さんに対する、委員長に任命されて、どういう評価をされているか、お伺いしてもよろしいでしょうか。

○田中委員長 今度の人事について、私は何もタッチしていませんが、多分、いろいろな方が見ていて、彼の能力を高く評価していると思いますし、とても私には及びもつかないようないろいろな能力を持っています。私は私なりのあれもあるかもしれませんが、彼は相当シャープだし、いろいろな専門的知識も、安全については、根っからの安全屋ですからね、持っています。そういう点では立派な人だと思っています。私は若いときからよく知っていますのでね。

○記者 重複する質問かもしれないのですが、どういったことに期待されますか。

○田中委員長 私から今の段階でどうしろ、ああしろではなくて、発足時から一緒にやってきたから、私が思っていることは大体全部、一々言う必要もないほど理解されていると思います。その中で自分の個性というか、持ち味を出していくのではないかと思います。

○記者 最後に、もう一人、委員に人事案で示された山中氏に関してなのですか、どのように評価しているか、お伺いしてもよろしいでしょうか。

○田中委員長 実は、山中先生は、私は炉安審の委員だということ以外は、余り深く話をしたことはないのです。専門も違いますし、世代も違いますので。ただ、阪大の副学長までやられているような方ですから、きっちりやっていただけたと思います。

○司会 ほかにございますでしょうか。コウノさん。

○記者 中国新聞のコウノです。

今日の規制委員会で原発5基の廃止措置計画が認可されました。改めて、これから廃炉作業が進んでいく上で、重要だと考えること、課題だと考えることをお聞かせ願えれ

ばと思います。

- 田中委員長 廃止措置の過程で事故を起こさないようにすることが一番大事なことだと思います。だから、大きいリスクから速やかに対処していくということですね。最終的には、廃棄物の問題もありますけれども、今、うちとしては、廃炉をにらんで、中深度処分の規制とか、そういうことを整備していますので、そういったものも踏まえて、きちっと対処していただければいいと思います。ただ、最終的な処分ということは、そう一朝一夕に行きませんので、安全にきちっと、廃棄物も管理するし、廃止措置も着実に進めるということが大事だと思います。
- 記者 核のごみをどこに持っていくかが課題となっているが、盛り込んでいないというのが課題と言われているけれども、これはどう解決していったらいいとか、考えはありますか。
- 田中委員長 それは、どうやるかというのは私どもの範囲の外なのです。事業者とか、推進官庁の問題で、規制官庁の問題ではないのです。ただ、廃止措置をする場合の安全を確保するという意味で我々の責任ですから、そこはきちりやるということで、今、いろいろ取り組んでいます。

- 司会 ほかにございますでしょうか。コダイさん。
- 記者 人事の話に戻って恐縮なのですが、一般の方から見ると、トップが変わるということで、それによって規制がどう変わるのかとか、あるいはどこは守られていくのかというのは関心元だと思うのですが、委員長としてはどのようにお考えでしょうか。
- 田中委員長 規制の基本的な形、実態は変わらないと思います。逆に言うと、一番それを具現化してきたのが次期委員長ですから、私は変わらないと思います。新規制基準に基づいてきちっとしたことをやるし、必要に応じてはバックフィットもかけるし、そういう基本的なスタイルは変わらないと思います。変えたら、規制委員会、規制庁の信用、先ほどのあれではないけれども、信頼を失墜することになると。今でも十分あるとは思っていませんけれども、少なくともそういう方向には努力しているわけですから、それを戻すようなことはしないというふうに思いますけれども。
- 記者 逆に厳しくなるのではないかとかというのはありますか。
- 田中委員長 それは分かりませんが、ある場合には厳しいし、ある場合には合理的に。でも、彼はずっと、皆さん御存じのように、審査の指揮をとってきているから、大体どういうお考えかは分かるのではないかと思いますけれども。
- 記者 それから、委員長のキャラクターというところも、はた目から見ると大分変わってくるのかなと思うのですが、昔からよく御存じということで、性格面での部分とか、キャラクターとして変わってくる部分というのは、委員長的には何かお考えはありますか。
- 田中委員長 プライベートなことは、いろいろもちろんつき合いは昔からありますけれ

ども、それがそうだ、どうだということはないと思いますけれども、規制委員、ここの公的な場では。私（わたし）的には、でも、頭がいいしシャープですよ、若いし。

○司会 では、続けて、ナギラさん。

○記者 毎日新聞のナギラです。

続けて、人事のことで伺いたいのですが、残りの半年間の委員長の在任期間をどういうふうにして残りの期間を過ごしていきたいと思っていられるかという点と、それから、少し早いのですが、規制委員長を退任された後に、今後、どういうふうに原子力にかかわっていかうと考えていらっしゃるのか、その2点、お願いします。もしくは福島とどういうふうにかかわっていくかという点で。

○田中委員長 残り5ヶ月ですけれども、ずっと連続的に、今、はやりの言葉でいえば、切れ目のない仕事が続いていますから、それをやはり続けてやっていくということだと思いますけれども。ここにはいろいろ申し上げませんが、いろいろ課題はたくさんありますので、そういうことかと思えます。

一つ大きなのは、法律改正を一つ4月に乗り越えたというのは、私たちにとっては非常に大きいのですが、その後、それをきちっと生かしていくということも含めて、審査も続いていますし、いろいろなことがいっぱい、いろいろな意味で取り組むべきことはたくさんありますから、私はできるだけ任期までじたばたして一生懸命やりたいと思っています。

その後のことは今は余り考えていないのですが、個人的にはやはりここに来る前に福島の皆さんに不義理をしてここに来たみたいなどころもありますので、少しはそういう点でかかわっていきなというような思いはありますけれども、もうその時期から見ると5年たつわけですから、どういにかかわり方がいいのかも含めてこれから考えたいと思います。

○司会 ほかにございますでしょうか。ナガノさん。

○記者 新潟日報のナガノと申します。

柏崎刈羽の断層の関係でお伺いしたいのですが、先日、地元の専門家・研究家が、柏崎刈羽の原発の敷地周辺の断層に関して、東電がこの間ずっと活断層ではないという根拠にしていた火山灰の年代について、20万年前に堆積したと言っていた火山灰について、こちらが約13万年前に堆積したというものの成分と一致したというふうな発表がありました。

新規制基準に照らせば、13万年前ということになれば活断層というふうになるわけですが、そうなれば審査にも大きく影響すると思いますが、こちらへの対応というのを、何かお考えがあればお聞かせください。

○田中委員長 この4年半、その手の話は山ほど次々と出てきて、いろいろな専門家とい

う方がいろいろなことを言うてくるのですけれども、頭からは否定しませんが、きちっとおっしゃっていることの根拠というのを、やはり我々としては、規制委員会、規制庁、多分この分野だと石渡委員が中心になって検討して、その上で判断するということになろうかと思えます。

○記者 関連なのですけれども、規制庁としてはこの関係で東京電力にも1回ヒアリングしたというふうには聞いていますけれども、それに関連して、田中委員長もこの柏崎刈羽の審査については、東京電力が事故を起こした当事者ということで、厳しく見るというような姿勢を多分示していたと思うのですけれども、こういった地元の研究者からこういう不安の声みたいな指摘があるということについては、どうお考えなのでしょう。

○田中委員長 科学的判断とか、科学的根拠というのは、地元だからとか、そうではないからということではないと思うのです。事実はきちっと調べて判断すればいいことであって、地元の方が言ったから、学者が言ったから尊重しなければいけないといったら、ほとんど規制は成り立たないというのが私の率直な印象ですから、そこはきちり我々としての判断をするということで取り組んでいただいていると思えますが、それでいいのですよね。

○司会 小林さん、では、補足で。

○小林長官官房耐震等規制総括官 総括官の小林です。

ちょっと補足だけさせていただきますと、地元の立石さんですね、立石さんが、刈羽テフラが20万年ではなくて12万年ではないかという御指摘なのですけれども、実は柏崎の場合、活断層の活動性評価に用いているテフラいわゆる火山灰ですね、これは刈羽の20万年だけではなくて、御承知のとおり、阿多鳥浜の20数万年前、それから、加久藤・小林の30数万年前ですね、こういった複数のテフラを用いて評価していますので、それで、もう活動性がないというふうに評価していますので、特段これは論点は残っていないと思えます。

ただ、今言われたように、今、審査継続中ですし、我々としては、念のためといえますか、ヒアリング等を通じて事実確認だけはしておきたいと考えています。

以上でございます。

○田中委員長 ということですので。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかにございますでしょうか。今、1名の方が手が挙がっていますが、これが最後でよろしいですか。では、今、手を挙げている2名の方ですね。ハンザワさんから。

○記者 福島民報社のハンザワです。

人事の話にまた戻ってしまうのですけれども、福島第一原発の廃炉の進捗状況につきまして、この5年半たって今の進捗状況に対する受けとめと、当時、就任時に比べまして特に進んだ点、また、そのときに思っていたよりも進んでいない点があれば、教えて

ください。

○田中委員長 就任時の間もなく、1Fについては、電源トラブルとか、汚染水が漏れるとか、そういうことで日々、明け暮れていて、しかも労災事故で死亡者まで出るというような状況だったと思うのです。そういった問題は相当解決されたと思っています。それから、今は敷地内よりも敷地外の方が線量が高いような状況になって、敷地内のいろいろな放射能対策は大分進んだと思っています。

ただ、私が思ったよりは、全体として見れば、少し遠回りしているなという感じがありますね。もっと東京電力自身が責任母体としてきちっと廃炉の取組をすべきで、周りが、ちょっと船頭が多過ぎるという感じが私はしています。

その一つの典型は、凍土壁とかタンクとか、ああいう問題だと思うのですが、いつもここでも何度も申し上げていますが、これからいろいろな廃棄物がいっぱい出てきますし、現に山積みになっていますから、そういったものの方がずっと本当はきちっと取り組むべきものなのですよ。そういう点で何が一番リスクが大きいのか、一番急がれるのは何かという判断が必ずしも適切に行われていないということが気になります。

うちは1F監視検討会で、これも更田さんが中心になって今までいろいろなことを申し上げてきていますが、そういう点ではまだまだ課題はあるなと思います。これはどうしても汚染水とか、デブリとか、そういう非常に人目を引くような話にばかりいくからだと思うのですけれども、そういう散発的ではなくて、もっと戦略的にきちっと取り組んでいく必要があるのだらうと思います。

○司会 それでは、最後に、クワシマさん。

○記者 共同通信のクワシマです。

もう一度、今日の廃止措置計画の話に戻ってしまうのですが、委員長が先ほど大きなリスクのあるものから対処することが大事だとおっしゃったのですが、具体的に大きなリスクのあるものというのはどういうものか、教えていただけますでしょうか。

○田中委員長 まず、原子炉でいえば、最大のリスクは使用済燃料の始末ですね。廃炉申請段階にある炉については、軽水炉については、もうプールに移っているのですけれども、それでリスクがなくなるかということではないので、そういうこともありますね。それから、原子炉の1次系とか構造物というのは、かなりレベルの放射能が高いし、汚染のおそれもありますから、そういうところの始末ができれば、多分、廃炉としては相当安心してよい段階で、あとは粛々と廃止を進めるということになるのだと思う。そこまでがやはり廃炉の一番大きなポイントだと思います。

○司会 本日の会見はこれで終わりにしたいと思います。お疲れさまでした。

